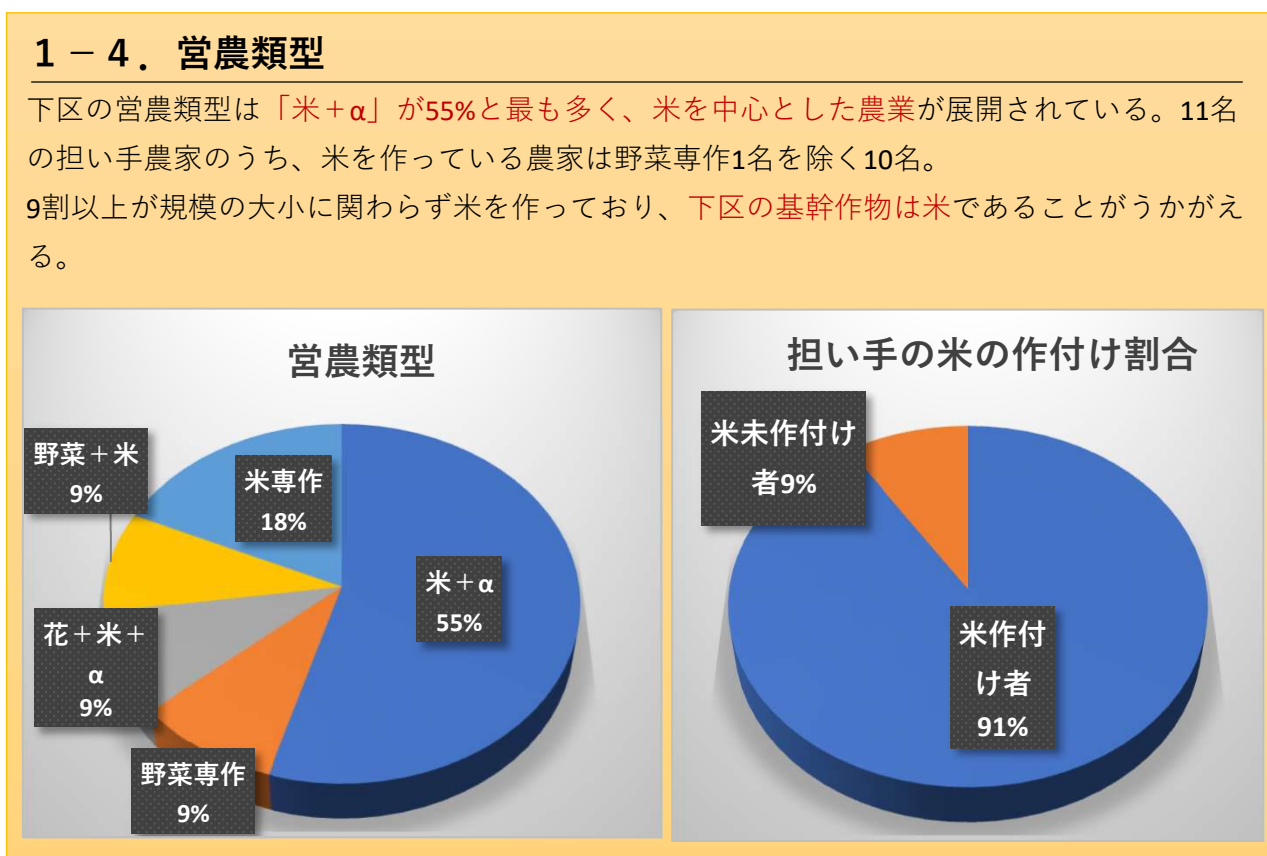
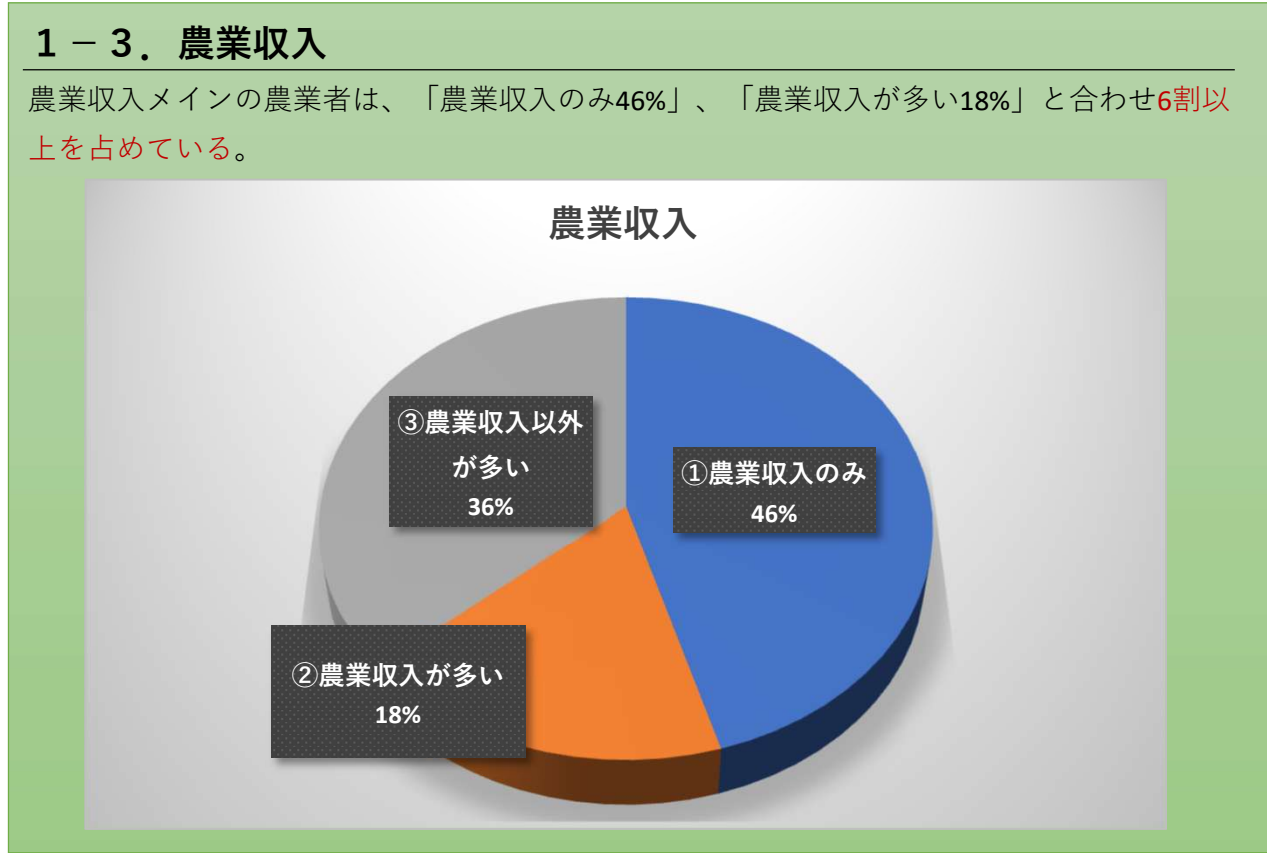
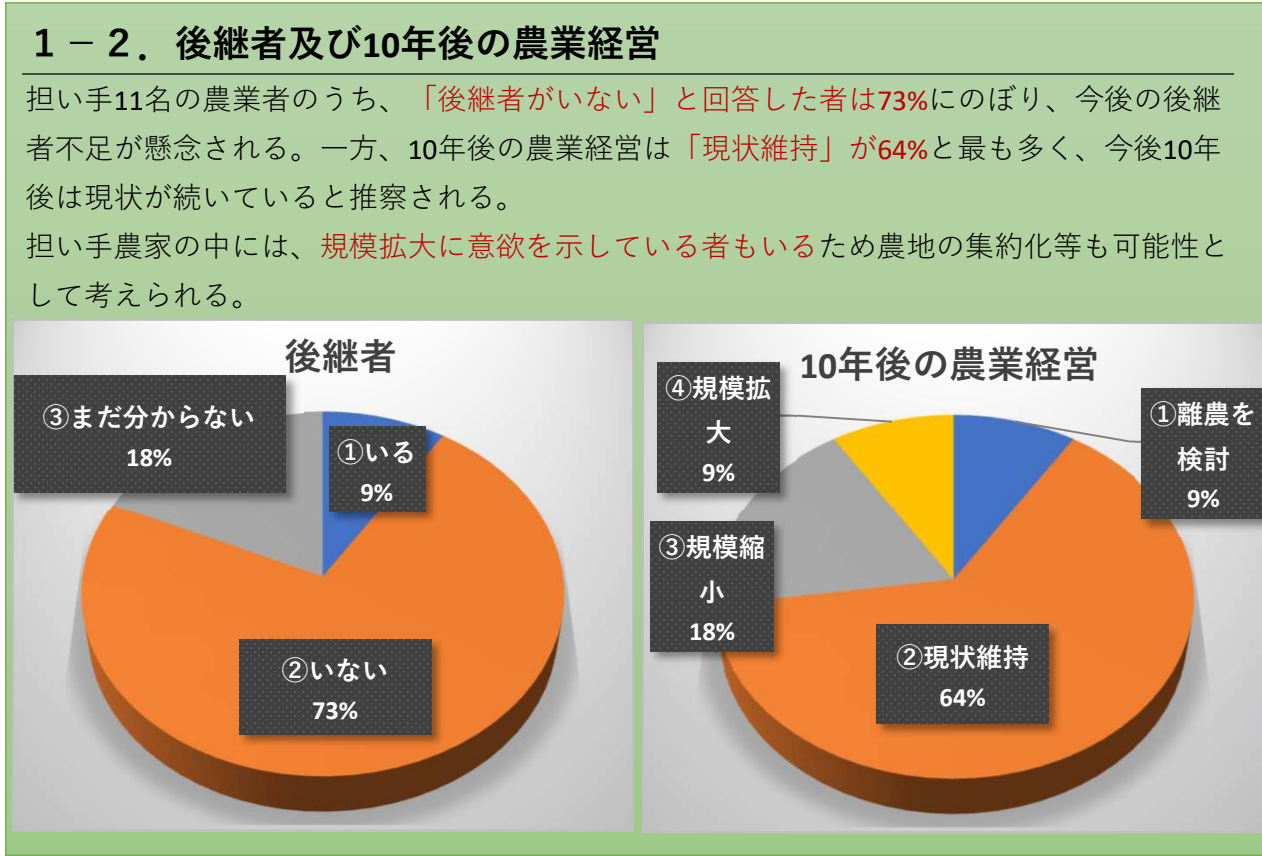
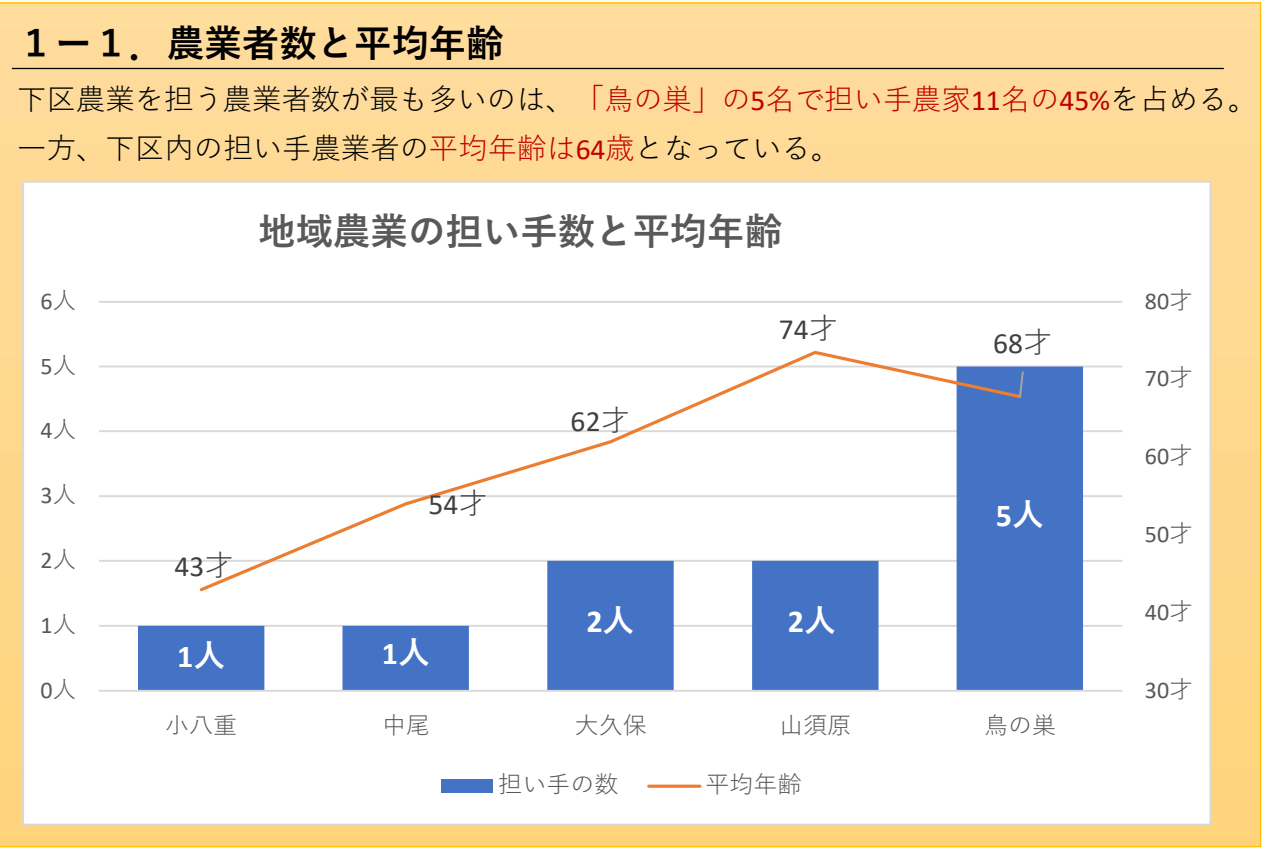


1. 下区農業の現況



2. 地域農業の存続に重要なもの

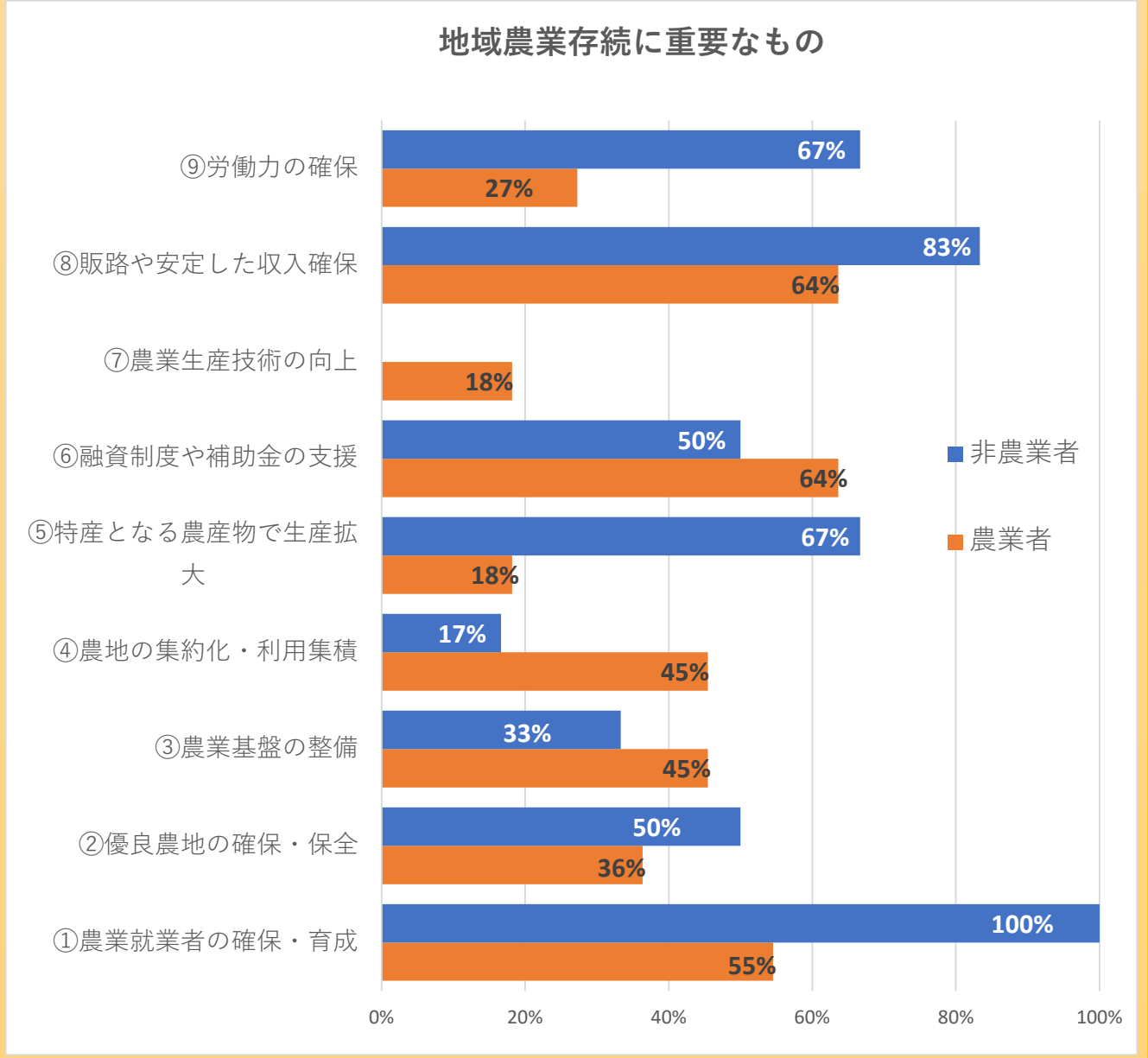
2-1. 農業者と非農業者の比較

農業者と非農業者では傾向が異なる。

農業者は、「販路や安定した収入確保」と「農業機械等の融資制度や補助金の支援」が**64%**と最も高い割合となっている。一方、非農業者では「農業就業者（新規就農者・農業後継者）の確保・育成」が**100%**となり最も高い。

「農地の集約化・利用集積」については、農業者が**45%**が重要と答えているのに対し、非農業者は**17%**にとどまる。しかし、「特産となる農産物を作り生産を拡大する」については、農業者が**18%**に対し非農業者は**67%**と圧倒的に高い。

これらのことから、下区の農業振興計画は、農業者の要望を踏まえつつ、農業者にはない視点を取り入れていく必要がある。



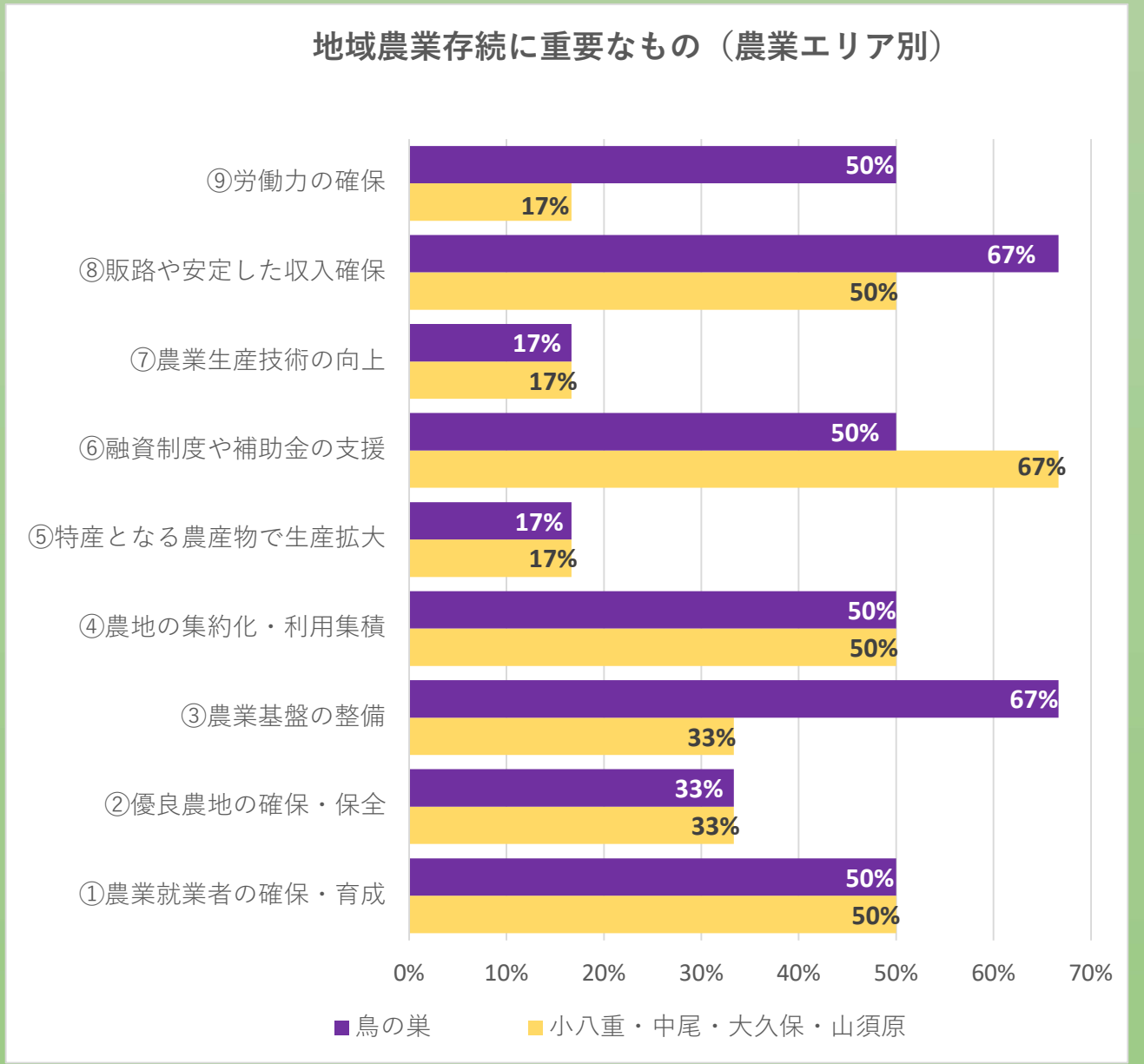
2-2. 農業エリアの比較

以下の2つのエリアに分けて11名の農業者を対象に比較を行った。

- ・基盤整備された農地で農業をしている「鳥の巣エリア」
- ・基盤整備されていない農地で農業をしている「小八重・中尾・大久保・山須原エリア」

「鳥の巣エリア」では、「農業基盤（大区画化・水路・農道）の整備」と「販路や安定した収入確保」がいずれも**67%**と最も高い割合となっている。鳥の巣座談会では、水路の更新整備事業の要望が多かったことを裏付ける結果となっている。

一方、「小八重・中尾・大久保・山須原エリア」では、「農業機械等の融資制度や補助金の支援」が**67%**と最も高い割合となっている。

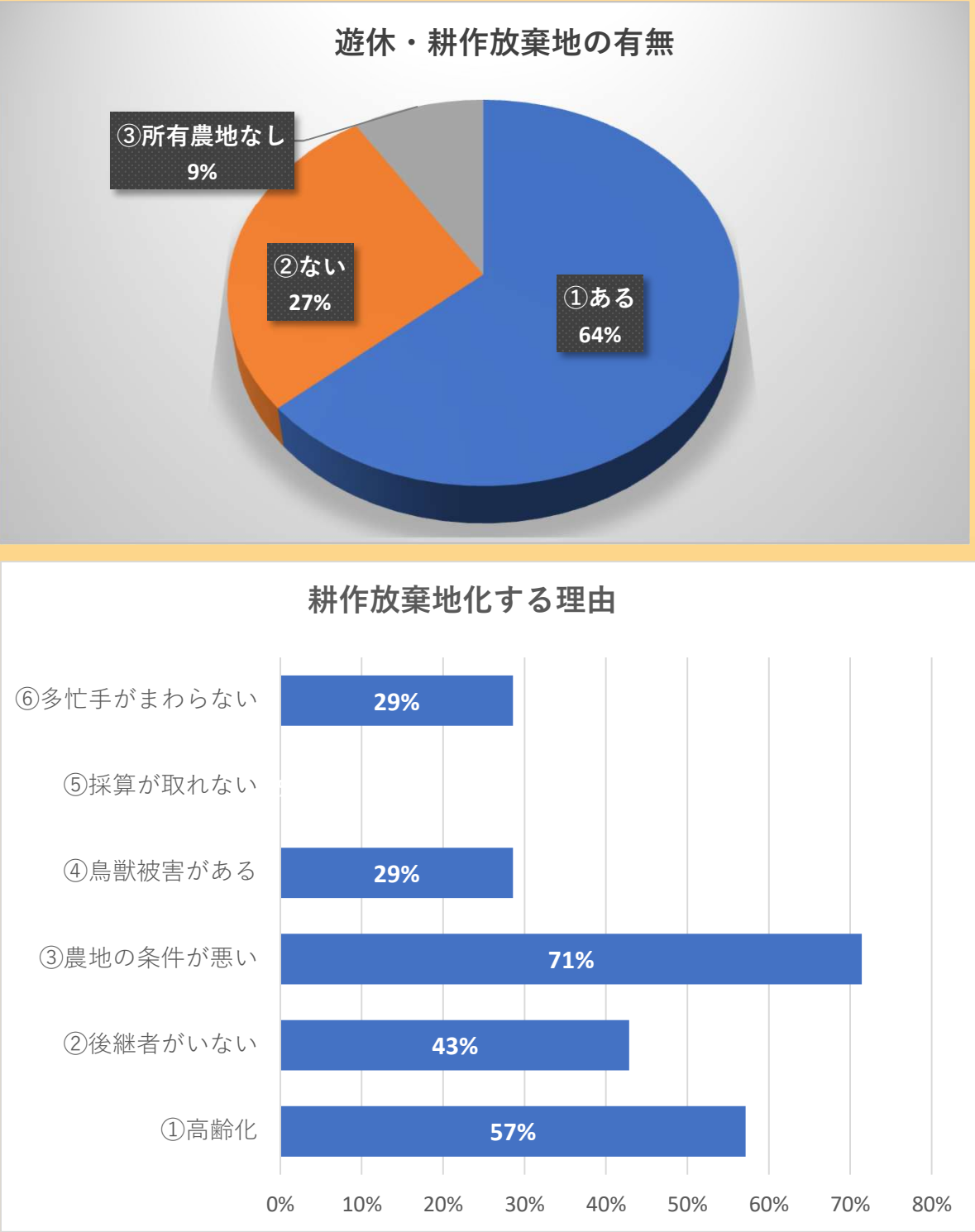


3. 休耕地や耕作放棄地の状況

3-1. 遊休・耕作放棄地の有無と放棄地化する理由

所有する農地で「遊休地」や「耕作放棄地」があるかの設問では、**64%の農家が「ある」と答えた**。

遊休・耕作放棄地となっている理由は、「**農地の条件が悪く耕作に適しない**」が**71%**と最も多い結果となった。座談会の中でも**台風災害で通水困難となり、米が作れず放棄地化した**との声が2つの集落から挙がっている。

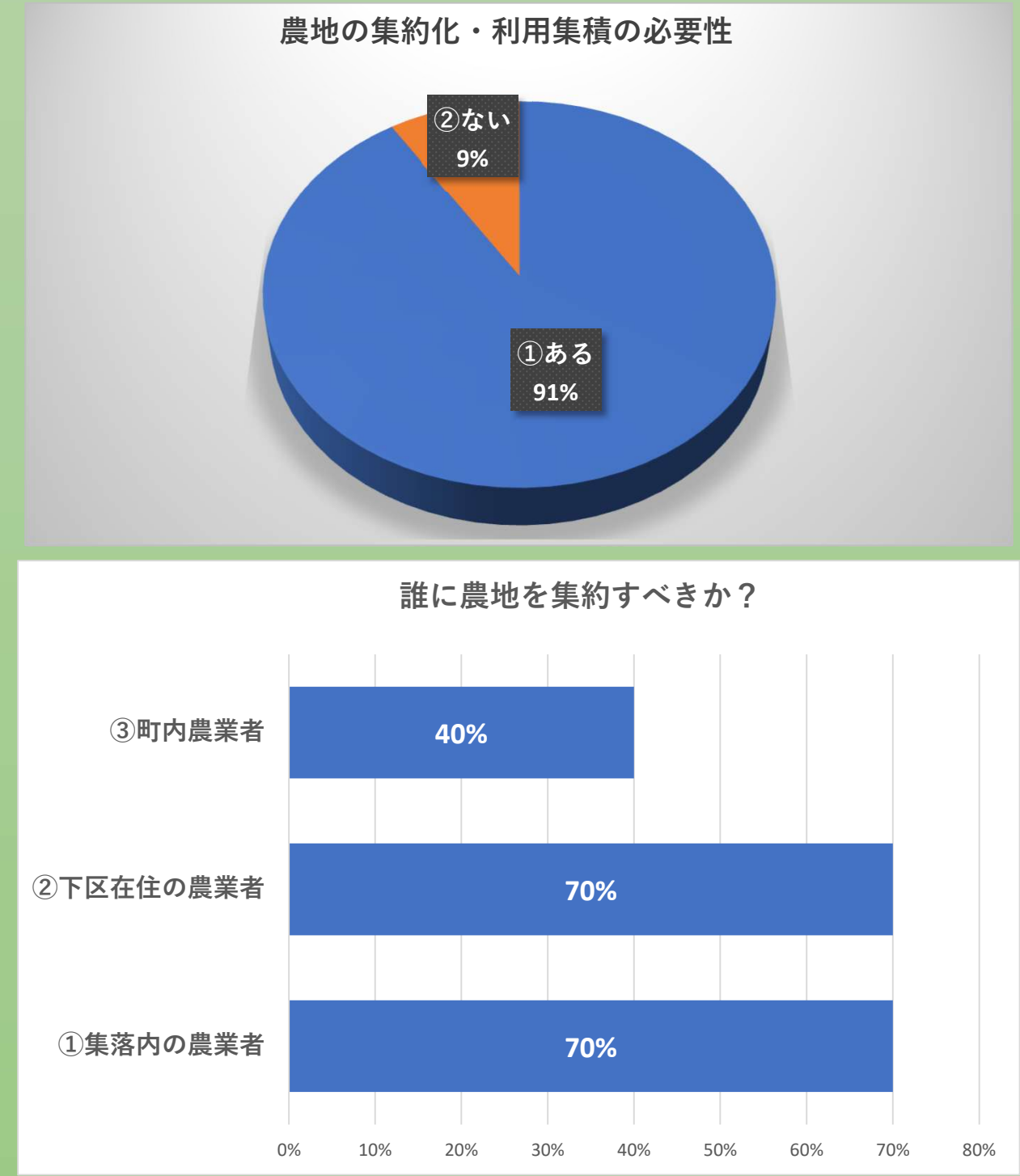


4. 農地の集約化や利用集積

4-1. 集約化・利用集積の必要性和集約先

「高齢化が進み耕作できない農地は担い手農業者に集める必要があるか」との設問に**91%の農業者が「ある」と回答**しており、農地の集約化や利用集積の必要性を感じている農家は多い。

次の設問で、「農地の集約先」について確認を行うと、「**集落内の農業者**」と「**下区内の農業者**」が**70%**と同列。座談会においても、「**知っている人に農地を集約したい**」という声や、「**水源地や用水路の水管理は集落外の人間では難しい**」との声があがっている。

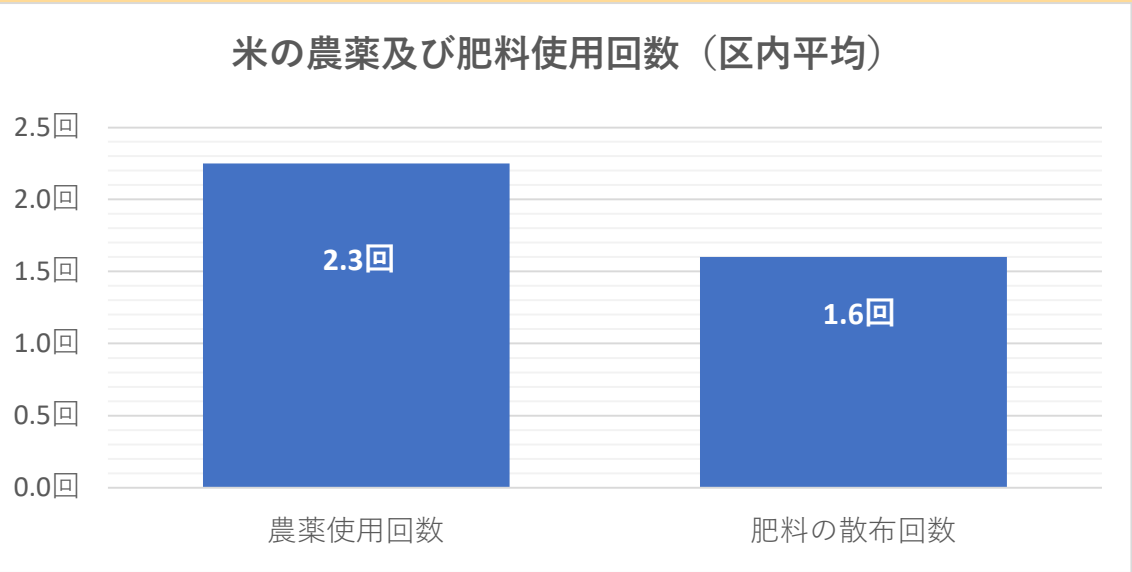


5. 環境保全型農業

5－1. 米の農薬及び肥料の使用回数

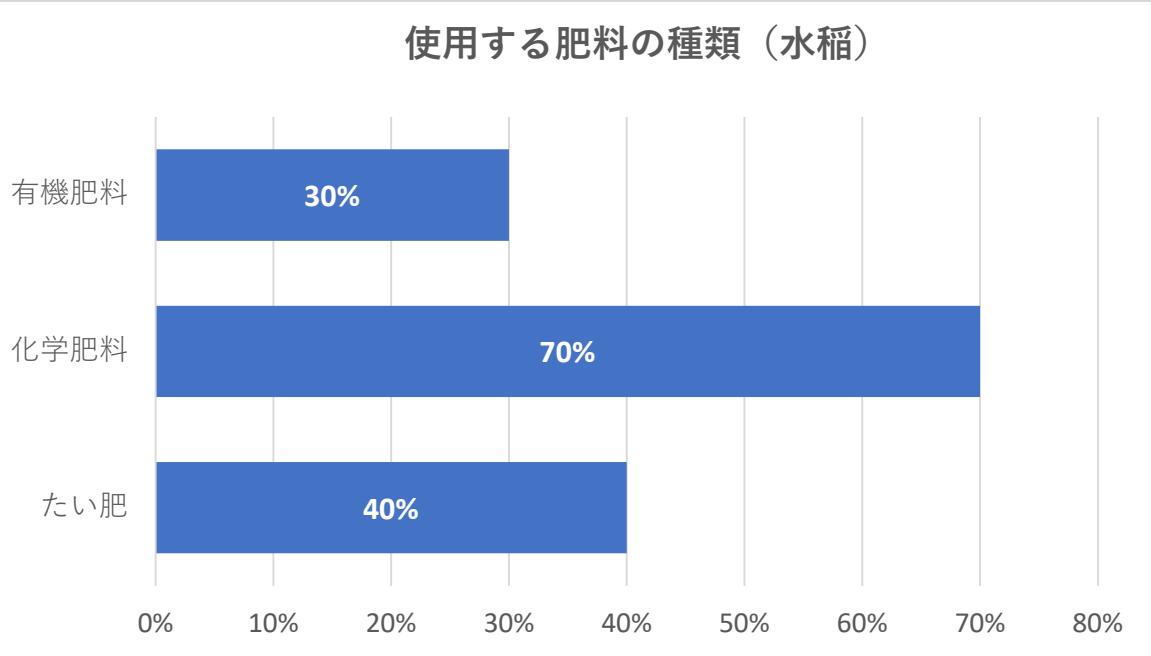
「下区米のブランド化」や「環境保全型農業直接支払交付金」の2つの可能性を検討するために、米の農薬や肥料の使用状況を確認した。下区の農薬使用回数は2.3回、肥料の平均散布回数は1.6回であり、特別栽培米の条件や当該交付金受給条件を満たす可能性があることがデータから示される。

該当農家から個別に、農薬や肥料の製品名や成分などを聞き取り再調査を行う必要がある。



5－2. 米に使用する肥料の種類

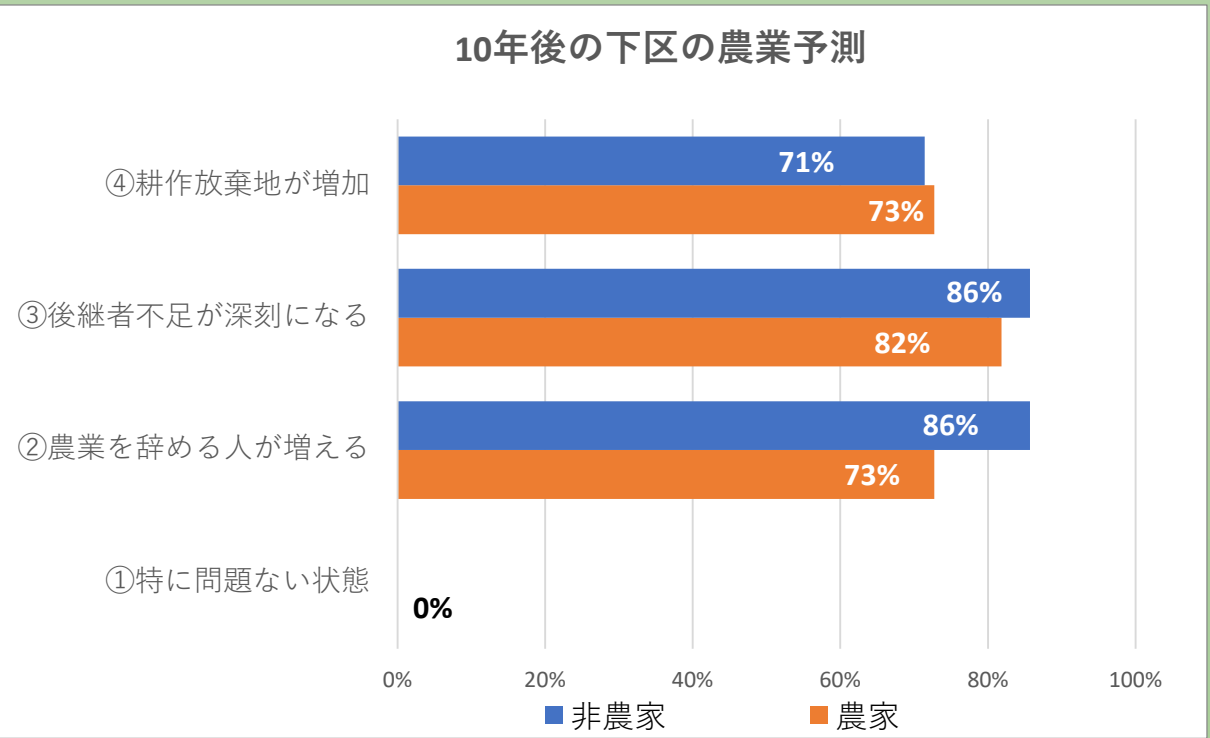
化学肥料の使用が最も多いが、「たい肥40%」と「有機肥料30%」ち土壌に優しい肥料も、下区内では使用されている。



6. 下区農業の将来予測と作業代行組織

6－1. 10年後の下区農業の予想

「特に問題ない（今と変わらない）」と回答した者は、農業者、非農業者ともにいなかった。アンケート回答者全てが、10年後の下区の農業に危機感を感じていることがうかがえる。



6－2. 管理受託組織や作業代行組織の必要性

下区に管理受託組織や作業代行組織が「必要ない」と回答した者はいなかった。農家、非農家ともに、「今すぐ必要」より、「将来的に必要」と回答する者が多く、高齢化が進む今後、当区では管理受託組織や作業代行組織のニーズが高まることが推察される。

